

2025年度(令和7年度) 研究推進案

2025年(令和7年)4月17日

研究推進部

1. 2025年度の研究テーマ

研究テーマ

学びをデザインする力を育てる

～主体的・対話的な授業の実現に向けたカリキュラム・マネジメント～

(1) 本校の現状と課題

本校は、今年度までの3年間にわたって「言葉による見方・考え方を働かせる授業づくり～『書く』ことを通した豊かな語彙の獲得を目指して～」を研究テーマに掲げ、研究を進めてきた。これまでの取り組みを通して、学習場面における子どもたちの語彙力や表現力の向上が実感できたという声が聞かれる一方で、年度末にとったアンケート結果からは、以下のような教師・児童双方の課題が明らかになった。

アンケート結果から見た教師・児童の課題

課 題	教 師	児 童
①学力差への対応	・学力差に対応した多様な指導方法を工夫する必要がある。	・学力差が大きく、個々に応じた支援が求められている。
②国語科での適切な課題の設定	・めあての設定や進度・難易度の見極めに課題があり、児童の実態に即した指導の工夫が求められる。	・課題を適切に言語化する力や問題文の文意を正確に読み取る力が不足しており、柔軟な思考力の育成が求められる。 ・話し合い活動において、自分の考えを整理し、伝える力が十分でないため、語彙力の向上を実感できる工夫を講じる必要がある。
③主体性を引き出す指導	・国語への興味・関心を引き出し、楽しく主体的に学ぶための仕掛けが求められる。 ・書くことに重きを置きすぎた結果、児童の関心や意欲を引き出せなかった。学習意欲の向上に向けた工夫が必要である。	・主体的に粘り強く考え抜く力を伸ばすことが課題である。 ・自ら問いをもち、学習に向かおうとする姿勢が育っていない。 ・授業内容はよく分かっているが、学習意欲が低い。
④ICTの効果的活用	・ICT活用については、タブレットを効果的に用いる力をさらに高め、児童の意見を引き出し、洞察力を育む指導が必要である。	・ICT活用の面では、ローマ字入力などキーボード操作に慣れていないことが課題として挙げられる。

⑤教師間の連携	教師間での温度差や取り組み方の違いを解決し、縦横の連携を強化する必要がある。	
---------	--	--

加えて、3年間にわたって本校の研究を支えていただいた今宮信吾先生は、①カリキュラム・マネジメントの充実と拡張、②探究的な学びの追究、③評価活動の定着（ルーブリックや単元ナビの活用）、④個別最適な学びへの挑戦、⑤ICTとアナログのハイブリッド活用の検証、⑥教師集団としての高め合い、⑦学級力を学年力、学校力へ拡充していくことの7点を今後の課題として挙げられており、私たちはそれらへの対応も求められている。

(2) 研究テーマの設定

先述の課題や指導助言等を踏まえ、2025年度の研究テーマを「学びをデザインする力を育てる～主体的・対話的な授業の実現に向けたカリキュラム・マネジメント～」と設定し、カリキュラム・マネジメントを通して、私たち教師が児童の学びを支える力の向上を図ることを提案する。

学習指導要領総則編によると、カリキュラム・マネジメントとは、以下の通り定義される。

第1 小学校教育の基本と教育課程の役割

4 各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の質の向上を図っていくこと(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努めるものとする。

すなわちカリキュラム・マネジメントは、各学校の質を向上させる手段として位置づけられるものである。ここで言う「質」とは、教育活動の質であり、突き詰めていくと現行学習指導要領の理念である「主体的で対話的な深い学び」へとたどり着く。さらに令和3年1月の中教審答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指してでは、この「主体的で対話的な深い学び」の理念を実現させるために「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが提唱されている。誰もが取り残されず、多様な他者と対話し、協力しながら課題を解決する学びを実現することは、上記のアンケートで挙げられた問題や、今宮先生から頂いた課題の克服にもつながると考えている。研究対象として、カリキュラム・マネジメントを取り入れた授業づくりを取り上げているのは、このような理由からである。

(3) 研究のアプローチ

上記のカリキュラム・マネジメントの定義に沿うと、カリキュラム・マネジメントの範囲は学校研究だけでなく、教育課程や施設管理、組織づくりなど多岐に渡る。そのため、学校研究としては「教科等横断的な視点から組み立てる授業づくり」とし、そのために私たち教師が求められる力を培うことに焦点を当てる。

具体的には、昨年度まで学校研究として取り組んできた国語科の学習内容を基幹としながら、

その学習プロセスの中に他教科等で習得した知識・技能を活用する場を設定し、児童が主体的かつ探究的に学ぶことのできる、実践的な授業づくりを推進していく。その中で、ICTの活用を含めた指導方法の工夫、多様な学力に対応する柔軟な指導、対話的な学びを促進する環境等について検討を重ねるようにする。私たち一人ひとりが、今一度学習主体である子どもを中心に置き、どのような学びの経験を重ねることが子どもたちにとって教育的価値のあるものかを考えながら、よりダイナミックな授業デザインを構想し、実践していく学校研究をめざしたい。

その前提として、私たちは教師集団として互いに高め合い、子どもたちの笑顔を増やし、学級力を学年力、学校力へとつなげていくことが期待されている。本研究を進めていく中で、教師間の温度差を解消し、縦横の連携を強化する取り組みも、アプローチのひとつとして取り入れていきたい。

2. 目指す児童像

私たち教師が学びをデザインする力を培い、カリキュラム・マネジメントを取り入れた授業づくりを進めるにあたって、最初に私たちが実現させたい「目指す児童像」を共有する必要がある。そこで今年度の研究においては、学校教育方針 めざす子ども像の中から、「主体的に学び、努力し続ける子」の実現をめざすこととする。先述の問題点等を鑑み、「自ら問いをもち、学び続ける児童」の実現を目指すこととする。発達段階に応じた、より具体的な子どもの様相は、以下の通りである。

学校教育方針 めざす子ども像 つよく ゆたかに 伸びゆく子		
(1) 主体的に学び、努力し続ける子		
<ul style="list-style-type: none"> ○自ら問いをもち、対話や探究を通して課題解決に向き合う ○根拠にもとづき自分で判断し、自己決定する ○主体性、自尊感情(自己肯定感)を高める 		
低 学 年	中 学 年	高 学 年
学ぶ楽しさを感じられる子	学びを深め、広げられる子	学びを創造し、発信できる子
<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えをもつ。 ○友だちの意見を聞き、やりとりを楽しむ。 ○「もっと知りたい!」といった問いをもつ。 ○学びの中でワクワクし、意欲的に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の意見を論理的に伝える。 ○友だちと考えを共有し、学びを深める。 ○既習の知識とつなげて、新たな問いをもつ。 ○気になったことを調べ、学びを広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学び方を自ら選び、目的意識をもって学ぶ。 ○課題を解決するために、主体的に調べ、考える。 ○学びの成果を振り返り、次につなげる。 ○学びを生活や社会と結びつけ、表現・発信する。

上に挙げた子どもたちの様相を授業の中で実現させるには、子どもたちが自分の意見をもち、友だちの考えに耳を傾けながら学びを深める場を設定したり、学習の見通しをもち、既習の知識と結びつけながら思考を広げる活動を設けたりすることが求められる。また各単元の学びと実生活とを結び付け、子どもたちが主体的に調べたり、学び方を選択したりする複線的な学びを保障することも必要となるであろう。このような学びのプロセスを取り入れた授業づくりを進めることで、子ども

私たちは問いをもって学ぶことを楽しみ、個々の見方や考え方を他者と共有しながら、自ら成長し続けようとする姿を期待する。

3.研究の重点

(1)国語科を基幹とし、カリキュラム・マネジメント(教科等横断的視点)を取り入れた授業実践

国語科はすべての学習の基盤となる教科であり、言語活動の充実を通じて、他教科の学びを支える力を育むことができる。そのため、教科等横断的な視点を生かし、国語科の学習を他教科と関連付けることで、児童が学びを深め、より主体的に取り組める授業を設計する。

具体的には、社会科や理科の内容と連携し、説明文の構成を学ぶ際に実際の調査活動を取り入れる、総合的な学習の時間と連動させて地域の課題について意見をまとめる活動を行うなど、実生活や他教科と結びつけた学びを展開する。また、ICTの活用を進め、児童同士の対話を促進し、多様な視点から考える機会を増やしていく。国語科を基軸としながら他教科と有機的に結びつけることで、児童が自ら問いをもち、学びを深める授業づくりを目指す。

(2)授業づくりの土台となる授業力・学級力を高めるための研修等

研究テーマの実現に向けて、私たち教師が前提として求められる力に、授業力・学級力が挙げられる。そこで、授業力・学級力の向上を図った研修等を適宜実施する。

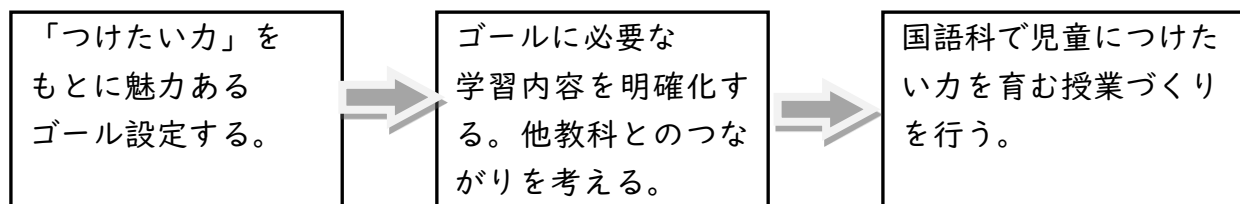
授業力の向上については、児童の実態に応じた指導方法を工夫し、学びの過程を丁寧に支えることで、学力差への対応を図るようにする。またICTの活用や対話的な学習活動を取り入れ、児童が自ら考え、表現する機会を増やすことで、学びの質を高める。

学級力の向上は、児童が安心して学び合える環境を整えるためにも不可欠なものと言える。そこで、特別支援部が提案するUDチェックシートを活用し、学級環境を客観的に把握する機会を設定する。また「学級力アンケート」を用いることで、児童の集団内での意識や関係性を数値化し、学級の実態を的確に捉え、必要な支援や指導を行うようにする。

授業力と学級力を高めることで、児童同士が互いの意見を尊重しながら学び合う風土を醸成する。教師は児童の関係性を深める支援を行い、安心して意見を交わせる環境を整えることで、児童が意欲的に学ぶ授業づくりを目指す。

(3)授業づくりの手立て

①単元の組み方



②ふりかえりのひな形を提示

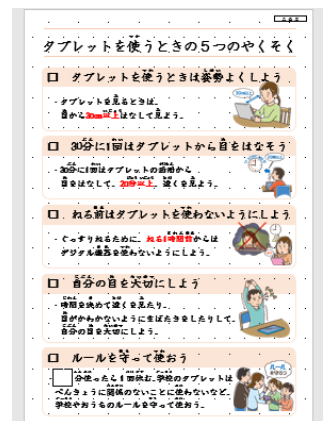
低・中・高での系統立てた形を掲示し、授業で活用する。

<p>低学年</p> <p>①できたこと・できなかったこと・わかったこと わからなかったこと</p> <p>②はっけんしたこと・おどろいたこと・ ころに のこったこと</p> <p>③もっとしりたいこと・もっとがんばりたいこと</p>	<p>中学年</p> <p>①学んだことのまとめ</p> <p>②学習後の自分の考え</p> <p>③学習のとり組み方（発表・ノート・話し合いなど）</p> <p>④気づき・ぎもん・もっと知りたいこと</p>
<p>高学年</p> <p>①学んだことのまとめ</p> <p>②最終的な自分の考え</p> <p>③学習の取り組み方（発表・ノート・話し合いなど）</p> <p>④気づき・疑問・もっと知りたいこと</p>	

③ICT の効果的な活用

- ・話を聞くときは タブレットのフタを閉じて聞く
- ・キーボード入力の習得
- ・鉛筆で書くこととの使い分け

学年	手書き	キーボード
低学年	9	1
中学年	5	5
高学年	4	6



3年生 以上のキーボード入力の目安

1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
【ログイン】に必要な文字を打つことができる。	【ソフトキーボード】を使って、文字入力することができる（日本語かな・フリック入力）	【物理キーボード】を使って、ローマ字入力ができる。	【物理キーボード】を使って、ローマ字入力ので短い文章が入力できる。	10分間に100文字程度	10分間に200文字程度

④学級力アンケート

学級経営・児童理解の手立ての一つとして、学年・クラスで必要に応じて、活用していく。

⑤UD チェックシートの活用

学級環境を客観的に把握する機会を設定するため。

既習の学習内容を提示している	必要な時にいつでも、学習内容を振り返ることができるため。
単元・1時間の学習の見通しなどを提示している	見通しを持って学習に取り組むことができるため。
子どもにわかりやすいめあてを提示している	「めあて」は短く提示し、授業中いつでも意識できるようにするため。

ICT(電子黒板、大型プロジェクター、実物投影機など)を活用している	視覚的に分かりやすくなり、児童の思考や理解を助けるため。
図や絵、写真を使うなど掲示物を工夫している	
見やすい板書をしている	重要な語句を目立つ色で示すことで、ポイントが分かりやすくなる。黒板内容とノート(ワークシート)を関連させることで、「書く」ことが苦手な児童もノートが書きやすくなる。また、ノート指導を行うことで、児童の思考や学習内容の理解を助けるものとなる。
ノート指導を工夫している(ワークシート)	
発表の仕方(型)を示している	「はい。〇〇です。」「〇〇さんと似ていて△△です」「〇〇さんに付け加えて□□です。」など、発表の型を示し、発表の仕方を伝える。
子どもの発言や行動を具体的にほめている	何がよかったのかをその場で具体的にほめることで自信につながるとともに、よい行動を定着させる。
ノートや新聞などのまとめ方について、子どもにわかりやすい評価をしている	目に見える賞賛(丸付け、シール等)をし、他の児童に提示することで、子どものやる気を引き出す。また、評価の基準を示すことにより、児童にめあてを持たせることができる。
集中できる時間に配慮して活動を組み立てている	教師の話聞き続けることが苦手な児童も、様々な授業形態を組み合わせることで学習に参加しやすくなる。

(3) 指導案の書き方 後日提案

(4) 校内研の取り組み

- ・研究全体会は年間 6 本行う。
- ・代表者・代表クラスのみが授業公開をする。
- ・他クラスは下校させる。
- ・プレイ室や専科は学年に属するのではなく、独立して研究を進める。
- ・指導案を検討する場に、研究担当と希望者が参加する。
- ・今宮先生だけでなく、市の指導主事、その他講師にも指導助言をいただく。

(5) 研究授業を学びの場にする手立て

- ・子どもの学びの姿を見取る
- ・子どもの表情や活動が確認できる場所で見取る
- ・子どもの1時間の学びの具体から見取る

(6) 研究の評価

- ・指導案・全体研究授業
- ・学校評価アンケート(教師、児童、保護者)に研究テーマに関連する項目を設ける。
- ・研究アンケートを実施する。
- ・CRT テストの正答率や意識調査
- ・学力テストの記述問題の正答率

4. 講師 今宮 信吾 先生(大阪大谷大学 教育学部教育学科 教授)

5. 研究計画

(1) 年次計画

1年次(令和7年度) 本年度

- ・研究テーマを共通理解する。
- ・カリキュラム・マネジメントの理念について学びを深める。
- ・教材研究と授業実践に重点を置いた研究を進める。
- ・カリキュラム・マネジメントした取り組みを各学年で一覧表にまとめる。

2年次(令和8年度)

- ・教材研究に力を入れ授業実践を深め、成果と課題の確認と検証をする。
- ・カリキュラム・マネジメントした取り組みを一覧表に追記する。

3年次(令和9年度)

- ・1.2年次の授業実践をまとめ、研究発表会を行う。
- ・成果と課題を検証し、次年度の方向づけを行う。

(2) 年間計画

4月19日(金)	研究全体研修会	研究推進部
6月19日(木)	第1回全体研究授業	〇年 今宮先生
7月 日()	笹中校区 授業交流会	摂陽小学校
7月3日(木)	第2回全体研究授業	〇年
7月24日(木)	夏季研修会	田村知子先生(大阪教育大学) 講話
8月21日(木)	笹中校区合同研修会(本校)	研究推進部
9月19日(金)	第3回全体研究授業	〇年
11月7日(金)	第4回全体研究授業	〇年
12月12日(金)	第5回全体研究授業	〇年 今宮先生
2月12日(木)	第6回全体研究授業	〇年 今宮先生
2月26日(木)	研究全体研修会	研究推進部

6. 授業力向上の取り組み

(1) 他教科研究授業

- ・コンサルタントを招聘し、指導案や授業についての助言をいただく。
- ・教師同士で授業を見合う場にしていくため、年度当初に授業者と日程を決定する。
- ・授業力の研鑽の場とするため、どの教科でも可とする。
- ・教職5年目以下・本校転任者は必修、それ以外は希望制にする。

(2) 対話型ミニ講座

- ・授業や学級経営など、気軽に学び合える教師集団を目指した取り組みとする。
- ・年度当初にアンケートを取り、回数・内容を検討する。